

## 第1回北九州市地域コミュニティビジョン検討会議

- 1 開催日時 令和7年4月21日 18:30～20:20
- 2 開催場所 北九州市役所本庁舎3階 特別会議室A  
(北九州市小倉北区内1番1号)

### 3 議題

#### (1)事務局説明

- ・北九州市地域コミュニティビジョン検討会議について
- ・座長選出について
- ・第1回検討会議について

#### (2)ゲストスピーカー講話

- ・「これからの地域コミュニティ」  
株式会社 KITABA 代表取締役 酒本 宏 様

#### (3)意見交換

### 4 出席者氏名

[構成員](順不同)

多田 政博	若松区自治総連合会会長
日高 徹	西小倉校区まちづくり協議会会長
太田 康子	北九州市婦人会連絡協議会事務局長
古賀 由布子	Say!輪(セイリング)代表
西村 健司	一般社団法人 コミュニティシンクタンク北九州代表理事
勢一 智子	西南学院大学法学部教授
松永 裕己	北九州市立大学大学院マネジメント研究科教授
大熊 充	うきはの宝株式会社代表取締役
古賀 えみ子	一般社団法人北九州シニア応援団代表理事
中村 真理子	元市民センター館長
斉藤 磨希	Z世代課パートナーズ

- 5 議事概要 : 配布資料に基づき事務局より説明、資料提供いただいた構成員より  
内容説明、意見交換。

## 6 会議経過(発言内容)(順不同)

### 多田政博 構成員

- 自治会長や自治総連会長として、現状の問題を解決しながら先に進める取り組みをおこなっている身としては、バックキャスト型思考に違和感を覚える。
- 未来から考えるより、自治会脱退や未加入の理由など、現状の問題点を洗い出し、解決していくことが地域コミュニティの未来像に繋がっていくと思う。
- 事務局からの仮説は、構成員に「この方向で進めて欲しい」という市の要望のような印象。

### 日高徹 構成員

- 子育て世代を対象に地域コミュニティに関する意識調査を行い、議論に取り入れてほしい。
- 福祉活動を含め、生活に関連するさまざまな取り組みを地域が受け持ち、地道に活動していることをもっと知ってほしい。
- 「楽しい集まりができればそれがコミュニティ」といった視点は違うと思う。生活という視点を議論の中に入れてほしい。

### 太田康子 構成員

- 30年前に婦人会を発足。現在も50代から80代のメンバーが楽しく活動中。年を重ねた時に「助けて」と言える仲になるため、今役立つことをしようと、ふれあい昼食会を始めた。
- 75歳時に大学入学、今春卒業。これまでの経験を生かして、若い人を下支えしていきたい。
- 大学で若者に地域活動について伝えて関心を得たが、活動を知る機会や参加の仕方がわからず参加できないと言われた。若い人に届くように地域活動の見える化が必要。

### 古賀由布子 構成員

- 子育て中の母親支援やさまざまな世代への防災啓発を展開。子育てママは「自治会なんか入らない」と言うが繋がりは欲しいようだ。
- 民間企業がコミュニティーナース事業(民生委員のような活動)や既存団体に属していない若者たちがまちについて意見交換する取り組みを展開。まちの明るい未来が見えた気がした。
- 上記について自治会の人たちに紹介すると胡散臭いと言われ心が萎え、世代間ギャップを感じた。横文字に拒否反応があるのかもしれない。

### 西村健司 構成員

- 地域の課題解決に取り組んでいる。現状はフォアキャスト型思考の地域が非常に多いと思う。
- 本日の会議で今後はバックキャスト型思考が必要だと感じた。町内会加入非加入に関係なく、なりたい未来の実現に必要なことを考えるほうが楽しく、若い人、NPO、企業も参加しやすい。

既存の活動をしている方々の経験やノウハウも活かせ、話が進むだろう。

- 中立的コーディネーターの役割も重要だ。

#### 勢一智子 構成員

- 国家レベルの社会政策課題を住民に近い地域コミュニティが受けとめざるを得ない状況にあり、「それは本当に地域コミュニティの課題なのか」整理することから始める必要がある。
- 地域コミュニティが何を担うのかは行政が決められることではなく、地域コミュニティは行政の下請けではない。住民目線、住民自治で地域コミュニティ側が決めていくことが地方自治の基盤であり、この検討会はそのための議論の場だと理解している。
- 地域コミュニティの考察に市民性や気質の視点は大事だが、マインド部分だけでなく、北九州市の都市文化も大事。「地域コミュニティとして集う場が必要」という意見が多いが、もともと北九州にある屋台や角打ちの文化を世代を超えて広げていくのも現実的な方法かと思う。

#### 松永裕己 構成員(座長)

- 目の前の課題解決と同時に、暮らし方やご近所との関係性、地域コミュニティのあり方等が変化するなかで、将来の求められる地域コミュニティのかたちや残すべき機能、新しい制度設計についての議論が必要。
- 地域コミュニティへ「いろいろな世代、特に若い世代の参加が必要」「世代間ギャップがある」という共通の論点が見えてきた。地域コミュニティの将来の話はしなければならず、2040年にどうなっていると良いのか、北九州の未来やいろいろな世代が参加するための手法やツールについてもみなさんと良いかたちで考えていきたい。
- 参考として企業の場合、日本はフォアキャスト型、アメリカはバックキャスト型。企業戦略のトレンドはバックキャスト型。

#### 大熊充 構成員

- 週替わりでおばあちゃんが店長を務める「ばあちゃん喫茶」を福岡県内で展開。子どもからおばあちゃんまで、地域の人々が集まるコミュニティの場になっている。
- 現在の地域コミュニティは、今後中心的存在になる若者たちの参加が抜け落ちている印象。戦術を展開しても解決せず、概念ごと変えるような抜本的な改革が必要ではないだろうか。
- 地域コミュニティの組織のトップを若者にして決裁権も渡し、報酬を含めて若者を押し上げる必要がある。若い人たちが先輩方に相談しながら責任を持って引っ張っていくようになり、未来をつくることにつながると思う。

古賀えみ子 構成員

- 「シニアが元気ならまちが元気になる」をコンセプトに、11年間シニア向け情報誌を発行中。
- 若者の手本となるアクティブシニア(北九州市のポテンシャルの一つ)をゴールドシニアに認定する「シルバーがゴールドに輝く北九州」構想およびゴールドシニアが誇りと責任感を持って自治会活動を行うプラットフォーム、組織作りを提案する。
- ゴールドに輝くシニアが活躍することで、若い人たちの未来に向けたまちづくりへの前進的な取り組みに影響を与え、2040年に向けて持続可能な新たな自治会活動につながる。

中村真理子 構成員

- 市民センターの館長として、地域の祭りの変革、イギリス式ガーデンづくり、認知症行方不明捜査や見守り、高齢者の講座参加促進の工夫ほか、さまざまな展開のお手伝いを行ってきた。
- 町内会の運営に市民センターがどこまで関わるのかは課題だが、市民センター町内会があれば良いと思っている。
- 市内に30数カ所あり、さまざまな主体が運営する「認知症カフェ」を居場所づくりというコンセプトで考えれば、部局を限定せずに市民が集う場として活用する途もあるのかもしれないと思っている。

齊藤磨希 構成員

- 地域のコミュニティの高齢化が問題になっているが、地域コミュニティ活動に参加している人は一軒家に住んでいる人のイメージがある。
- マンションに住んでいる人、特にマンションで一人暮らしの人は町内会、地域コミュニティ活動の情報に触れる機会がないように思う。
- 全世代参加型のコミュニティをつくるには、マンションに住んでいる人たちも巻き込む必要があり、そのためにどういう魅力があるコミュニティをつくれれば良いのか少し疑問に思っている。

酒本宏 氏(ゲストスピーカー)意見交換を聞いて感じたこと

- 2019年頃からバックキャスト型のワークショップを数多く行ってきたが、参加者に自分ごととして考えてもらうのはとても難しい。
- 2040年に自分がどうなっているのか、どう感じ、考えているのかを議論すると自分ごととしてバックキャスト型の思考に少し入りやすくなる。
- 例えば、参加者の意見が出やすくなるよう、「32歳の旦那さん、30歳の奥さん、子ども一人でどういう暮らしをしたいか」をテーマにする等、自分ごととして考えられる工夫をしたワークショップを行うと良い。